

J17b 「すざく」を中心とした 2006 年 4 月の SS433 多波長同時観測：1

久保田香織、上田佳宏 (京都大学)、小谷太郎、河合誠之 (東京工業大学)、並木雅章 (大阪大学)、衣笠健三 (ぐんま天文台)、尾崎忍夫 (西はりま天文台)、長田哲也 (京都大学)、西山晋史 (大阪教育大学)、中西康一郎 (国立天文台野辺山)、塚越崇 (総合研究大学院大学)、柳澤顕史 (岡山天体物理観測所)、下川辺隆史、石村拓人 (東京工業大学)、飯島孝 (パドバ大学)、S. Trushkin、S. Fabrika(SAO)、VSNET、VSOLJ、他 SS433 多波長観測キャンペーンチーム

2006 年 4 月に約一ヶ月間に渡って行なわれたマイクロクエーサー SS433 の多波長同時観測の初期解析結果を報告する。この観測は「すざく」衛星を中心として組織されたもので、電波から硬 X 線をカバーする最大級のキャンペーン観測となっている。観測に参加した組織は以下の通りである。X 線：「すざく」衛星。可視光分光：ぐんま天文台、西はりま天文台、SAO Bolshoi Azimuthal Telescope、パドバ大学アジアゴ天文台。可視光、近赤外測光：IRSF、岡山 MITSuME 50cm、明野 MITSuME 50cm、Crimean Observatory、大阪教育大学 50cm、京都大学屋上 40cm、VSOLJ、VSNET。電波：SAO RATAN-600、SAO 32m 電波望遠鏡、野辺山ミリ波干渉計。

X 線観測の第一の目的は、最近の XMM ニュートン衛星による観測から発見された、ジェットの本元にある $N_H \sim 10^{24} \text{cm}^{-2}$ の強い吸収体 (久保田 2005 年春季年会 H37b) の正体を明らかにし、SS433 の真の放射エネルギーとジェットの運動エネルギーを求めることにあった。「すざく」衛星による $\gtrsim 10 \text{keV}$ 以上の連続成分および吸収端スペクトルの観測と、可視光分光による正確な歳差位相モニタによりこれは達成される。

この間に、RATAN600 は 2 回の $1 \text{Jy} (@2 \text{GHz})$ を越える電波フレアをとらえた。この現象の頻度は 2.6 年に一度程度で、多波長同時キャンペーン中に起きることは極めて稀である。この結果についても報告する。